

# 岡山県・西大寺の牛玉所ごおうしょでん殿に安置される 厨子入り五大明王像について

見 田 隆 鑑

## はじめに

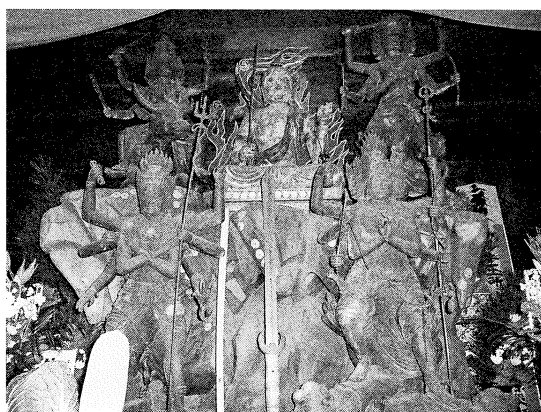
本稿で紹介する作品は、岡山県岡山市にある真言宗寺院、西大寺境内にある牛玉所ごおうしょでん殿に安置される厨子入りの五大明王像（秘仏）【図版1】である。この尊像は、牛玉所殿の本尊・牛玉所大権現ごおうしょだいこんげんとして祀られている尊像で、厳密な秘仏ではないが、通常は非公開で、毎年元旦から一週間だけ公開されている。本稿では、この尊像の調査<sup>1)</sup>をもとに作品の情報を記録するとともに、若干の考察を加えたい。



【図版1】 厨子入り五大明王像

現在、牛玉所殿には五大明王像【図版2】が前立まえだちとして安置されているが、この五大明王像は厨子入りの五大明王像の姿をモデルとして近年制作されたものであり、中尊の不動明王坐像は本堂に

安置される平安時代後期の不動明王坐像【図版3】をモデルとしている。



【図版2】 前立として安置される五大明王像

## 1. 作品の概要

五大明王像は、幅23.3 cm、奥行き19.1 cm、高さ32.0 cmの厨子に納められており、波涛をあらわす岩座の上に五体の像が個別に安置されている。不動明王を主尊として、向かって右側に降三世明王（手前）と金剛夜叉明王（奥）、向かって左側に軍荼利明王（手前）と大威徳明王（奥）を配置する一般的な東南法による配置方法である。

台座部分を含む像全体の大きさは、幅16.7 cm、奥行き13.5 cm（框座下）、高さ23.8 cm（地付～大威徳の光背頂まで）であり、各尊像の大きさは、不動明王5.4 cm（岩座～火焰）、降三世明



【図版3】 本堂安置の不動明王坐像

王10.1 cm、軍荼利明王10.2 cm、大威徳明王8.4 cm、金剛夜叉明王10.1 cmである<sup>2)</sup>。岩座には白・緑・赤・黄(2)の4色をあらわす計5つの玉が嵌め込まれている【図版4】。

不動明王は岩座と火焰光背を含めて一鑄(黄銅製?)で、現状は木製の台座に固定されている。その他の四大明王は、一木造の彩色像である。立像の降三世明王、軍荼利明王、金剛夜叉明王は足柄を造り、各台座となっている大自在天・烏摩妃(降三世明王)、踏み割り蓮華座(軍荼利明王・金剛夜叉明王)に設けられた柄穴に差し込むようになっている。光背は、降三世明王分は失われているが、その他の3体の明王は火焰(3つ)を伴う法輪型の頭光(銅板製)を取り付けており、各像の冠飾・冠繪や持物も銅板製である。



【図版4】 台座部分に埋め込まれる玉

## 2. 各明王の姿について

本作品の五大明王各像の姿は以下のようである。

## ① 不動明王坐像

頭髮は総髪を梳り、頭頂部で結び束ね、残りの髪を左右の肩に下ろす。面相は両目を見開き、口元に牙を互い違いに（右は上出、左は下出）あらわす。上半身に条帛、下半身に腰布と裙をつけ、岩座上に半跏趺坐する。右手に剣を、左手に羂索を執る。装身具として臂釧、腕釧をあらわす。光背は左方に流れる火焰光背。



## ② 降三世明王立像

四面八臂像。各面とも三目相、上歯牙で下唇を噛み、左右口元に牙を上出する。頭髮は頭上に単髻を結び、髪際左右に焰髪をあらわす。四面は各面とも個別にあらわし、一つの首にまとめる。左右第一手は胸前で降三世印（左手外）を結び、現状、左手は上から①三叉戟、②弓、③蛇を、右手は上から①金剛鈴、②欠失、③欠失である。上半身に条帛、下半身に虎皮裙をつけ、装身具は冠帯、



冠繪、臂釧、腕釧、足釧をつける。右足を曲げて烏摩妃の胸部を踏み、左足を伸ばして大自在天の胸部を踏む。側面観はやや前傾姿勢であらわされる。

### ③ 軍荼利明王立像

一面八臂像。三目相、上歯牙で下唇を噛み、左右口元に牙を下出する。頭髪は頭上に単髻を結び、正面に冠飾をつける。髪際左右に焰髪をあらわす。左右第一手は胸前で大瞋印（右手外）を結び、現状、左手は上から①欠失、②戟、③欠失を、右手は上から①欠失、②欠失（補修?）、③与願印である。上半身に条帛、下半身に虎皮裙をつけ、装身具は冠帯、冠繪をつけ、各手の手首と足首には白蛇が絡みつく。右足を曲げ、左足を伸ばして踏み割り蓮華座上に立つ。火焰（3つ）を伴う法輪型の頭光（銅板製）をあらわす。側面観はやや前傾姿勢であらわされる。



### ④ 大威徳明王騎牛像

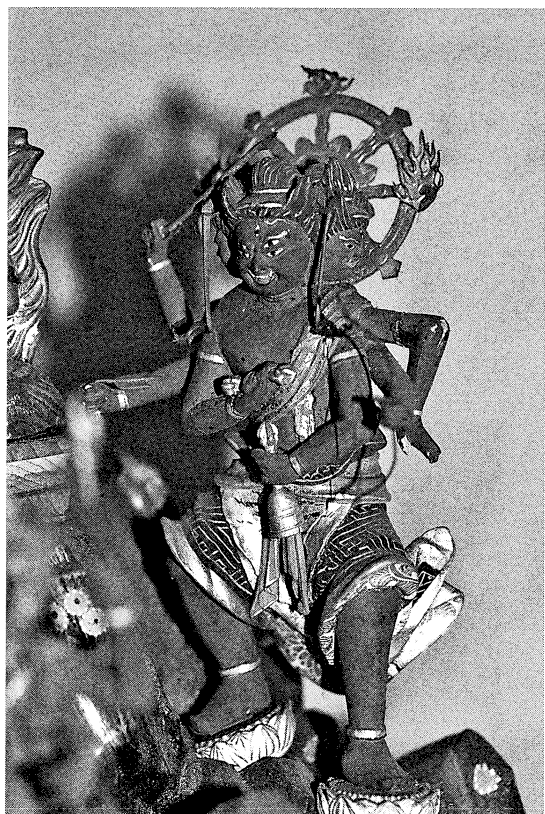
六面六臂六足像。下の三面は三目、本面の頭上にあらわされる三面は二目。下の三面は左右口元に牙を上出する。正面の一面を除き、頭髪は頭上に単髻を結び、正面に冠飾をつける。下の三面は髪際左右に焰髪をあらわす。左右第一手は胸前で檀陀印を結び、現状は左手は上から戟、掌を仰ぐが持物は欠失（法輪?）、右手は上から宝剣、宝棒である。条帛、腰布、裙をつけ、装身具は冠帯、冠繪、臂釧、腕釧、足釧をつける。左足第一足を曲げ水牛の背に乗せ、残りの足は下におろして臥牛の背に坐る。火焰（3つ）を伴う法輪型の頭光（銅板製）をあらわす。



### ⑤ 金剛夜叉明王立像

三面六臂像。正面のみ五目開口相で左右口元に牙を上出する。両脇面はともに三目相、左右口元に牙を上出する。頭髪は頭上に単髻を結び、髪際左右に焰髪をあらわす。各面とも個別にあらわし、一つの首にまとめる。左第一手は腹前で金剛

鈴を執り、右第一手は胸前で五鈷杵を執る。現状、左手は上から不明（手の接合が間違っている）、弓を、右手は上から宝剣、矢を執る。上半身に条帛、下半身に虎皮裙をつけ、装身具は冠帯、冠繪、臂釧、腕釧、足釧をつける。右足を曲げ、左足を伸ばして踏み割り蓮華座上に立つ。火焰（3つ）を伴う法輪型の頭光（銅板製）をあらわす。側面観はやや前傾姿勢であらわされる。



### 3. 牛玉所大権現ごおうしょだいこんげんとしての五大明王像

各像の造形を見ると、不動明王を除く四大明王については、細部の違いは見られるものの、概ね京都・東寺講堂の四大明王像や、それに準じて制作された四大明王像の図像を規範として制作され

た尊像と捉えられる。

江戸時代の厨子入りの五大明王像には、奈良・宝山寺像や佐賀・実相院像などがあるが、特に宝山寺像は、宝山湛海（1629～1716）の作で、元禄14（1701）年に制作されたことが分かっている。

湛海が73歳の時に赤梅檀を材料として制作した宝山寺の厨子入り五大明王像は、四大明王が蹴起する躍動感ある姿であらわされ、その配置も前方に軍荼利明王と大威徳明王、後方に降三世明王と金剛夜叉明王を配置し、一般的な東南法に基づく五大明王の配置とは異なる点で特徴が見られる。

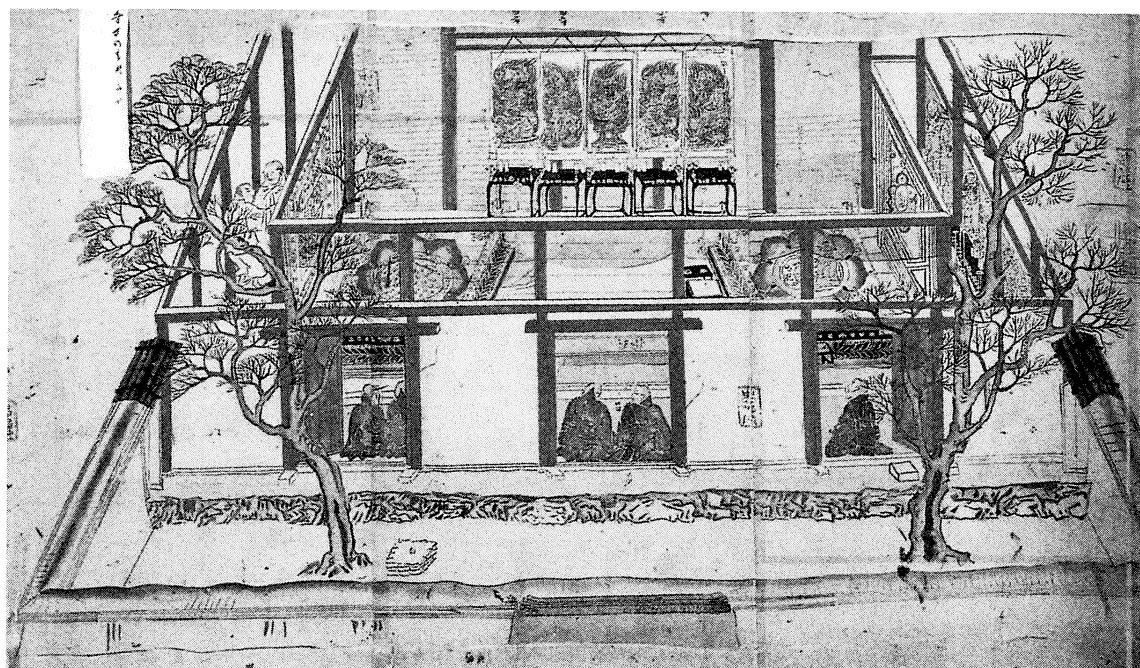
また、中尊・不動明王が金色像である点<sup>3)</sup>も現存する五大明王の遺例の中で特徴的な造形と言える。この宝山寺像は、西大寺像の中尊・不動明王坐像が金色の鑄造仏としてあらわされることの先例として位置づけられる作品でもある。

本作品の場合、不動明王坐像が鑄造仏<sup>4)</sup>である点、また、規格も四大明王像と全く異なる点が大きな特徴と言える。それは、この作品が五大明王像ではなく、「牛玉所大権現ごおうしょだいこんげん」として祀られている点とも関わるものと考えられる。

「牛玉所大権現ごおうしょだいこんげん」は、西大寺観音院の鎮守として信仰されているが、このような呼称の権現は他には見ることができない。

「牛玉ごおう」は一般的に知られるものでは、中世以降、護符や起請文として使われる牛玉宝印ごおうほういんがある。この「牛玉」という言葉が生まれた背景について、日野西真定氏は、後七日御修法<sup>5)</sup>【図版5】における如意宝珠信仰とともに、正月の御魂信仰みたまが結びつき、「牛黄（王）」から「牛玉」へと変化した可能性を指摘されている<sup>6)</sup>。

牛玉宝印と五大明王が直接関係を持つ事例について筆者は知らない<sup>7)</sup>が、本像との関係で見た場合、例えば岩座に5つの玉が埋め込まれる点は、牛玉宝印にも関わる宝珠（如意宝珠）を意識する表現とも受け取れる。また、後七日御修法において五大明王の壇が設けられる点を考慮すれば、牛玉宝印の信仰に五大明王が関わってくる点も一応



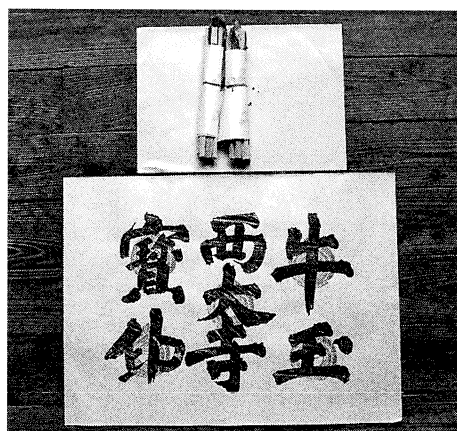
【図版5】『年中行事絵巻』より後七日御修法

の関連性は認められる。

西大寺では会陽<sup>えいよう</sup>と呼ばれる裸祭りが現在も行われており、この行事で投下される福杖（宝木<sup>しんぎ</sup>）には牛玉宝印が巻かれている<sup>8)</sup>【図版6】。この牛玉宝印の信仰と五大明王の信仰が習合した形が、現在の「牛玉所大権現」としての五大明王像ではないかと考えられる。牛玉宝印には除災・厄除の功德が期待されており、五大明王もそのような性格を持つ尊像であることも関係が生まれた背景かもしれない。

西大寺の会陽については、宮本升平氏が「牛玉宝印と民俗行事—修正会との関係を中心として—」<sup>9)</sup>の中で一事例として詳しく取り上げられており、西大寺の会陽も修正会を背景に持つ行事で、少数の護符を奪い合う形式は、西大寺に残る『金陵山古本縁起』から既に15～16世紀には成立していたと指摘されている。

また、会陽で奪い合いが行われる「宝木<sup>しんぎ</sup>」は“寿・富・康寧・好徳・終年”の五福をもたらす



【図版6】西大寺の牛玉宝印

ものとされている。五福は、『書経』には、「五福。一日壽、二日富、三日康寧、四日攸好徳、五日考終命。」と見られ、特にこの会陽の行事に限定されるものではないが、この五福の「五」という数字において、牛玉所大権現の姿が五尊からなる五大明王であらわされる点や、その台座部分に5つ

の玉があらわされる点との関連性も窺えるようにも思われる。

## おわりに

牛玉所殿は火災に遭っており、現在の牛玉所殿は、明治13(1880)年に再建された堂宇である。本像は、厨子や台座などに特に銘文を確認することができず、この尊像に関係する文献上の記録も存在しないことから、この尊像が、焼失した旧牛玉所殿の本尊としてもともと信仰されていたものなのか、その前立の役割をなした尊像なのか、あるいは再建にあたり当初の牛玉所権現にかわる尊像として安置されるようになった尊像なのかは不明である。

しかし、本作品では通常の五大明王像には見ることのできない要素や表現が見られることから、少なくとも牛玉所殿に安置する尊像という意識のもとで制作された作品であろうと考えられ、西大寺特有の造形作例と言えるのではないだろうか。

国内に残る五大明王の作例には、寺院に安置される尊像ばかりではなく、神社に伝わる作例も京都・佐牙神社に伝来した寿宝寺像と正福寺像、東京都・五社神社像など平安時代に遡って幾らか確認することができる。

逆に、もともと神社に置かれていたが、廃仏毀釈などの影響を受け、現在は寺院に移座している作例もある。それらは、本来安置されていた寺堂の焼亡などの事情でたまたま移座したものが残った可能性もあるが、神仏習合の信仰を背景とした明確な目的によって安置されたものも存在するように思われる。

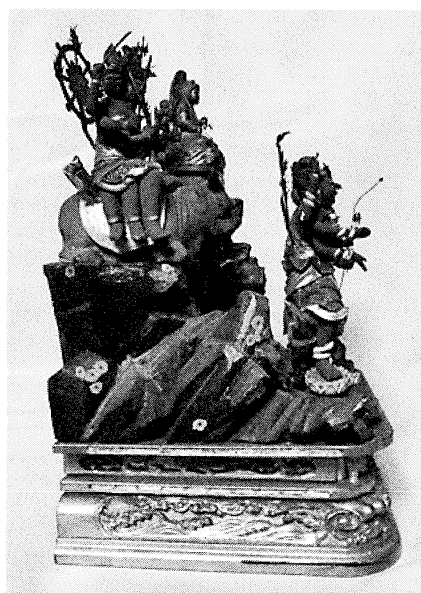
西大寺で「牛玉所権現」として安置される本作品は、制作年代は18世紀中後期と思われ、五大明王像の中でも特別古い作品ではないが、寺院特有の信仰を背景とし、権現のイメージとして五大明王を選択する点で非常に興味深い作品と考え

る。制作背景については不明な部分が多く、本稿では作品を紹介する程度の内容であるが、内容に関しては大方のご批判を頂き、ご意見を頂けたら幸いである。

## 注

- 1) 筆者は2014年2月19日に西大寺にてこの尊像を拝見する機会を得た。熟覧の機会を頂きました西大寺住職・坪井全広様には心より御礼申し上げます。
- 2) 降三世明王をはじめとする四大明王像の法量は、各像の頭頂から足裏までの大きさをあらわす。不動明王像は一鑄のため岩座から火焰光背の先端までの大きさをあらわしている。
- 3) 不動明王坐像でその姿が金色相であらわされる作品には、奈良・帯解寺の不動明王坐像(12世紀)がある。
- 4) 金銅製の不動明王が特別に信仰対象となっている事例には、宮城・大徳寺の不動明王坐像の胎内仏(西年のみ公開)がある。
- 5) 【図版5】の後七日御修法の挿図は、小松茂美編集・解説『年中行事絵巻』(中央公論社, 1987年)より引用。
- 6) 日野西眞定「日本における牛玉信仰—『大正新脩大藏経』の中にみられる—」(『山岳修験(17)』, pp. 27-43, 1996年)。
- 7) 奈良国立博物館所蔵の唐招提寺伝来とされる鎌倉時代中期頃の版画「薬師如来・五大力吼像」には五大力菩薩と薬師三尊があらわされており、この版画は修正会の際の牛王札として用いられたものである可能性が指摘されている。菊竹淳一編『日本の美術218 仏教版画』(至文堂, 1984年), p. 63。修正会の五大力菩薩との関わりから、五大明王に関連性が生まれてくる背景も考えられる。
- 8) 西大寺の牛玉宝印【図版6】については、西大寺HPより引用。<http://www.saidaiji.jp/website/eyou>
- 9) 宮本升平「牛玉宝印と民俗行事—修正会との関係を中心として—」(『西郊民俗(173)』, pp. 23-35, 2000年)。

みた・たかあき / 文化情報学部講師  
E-mail : t-mita@sugiyama-u.ac.jp



厨子入り五大明王像（牛玉所権現像）の全体像